

仕組みの完成度が業績を左右する

～ 活性化で利益体質の強化が図れる～

第 17 回 発行日：2006年 2月 13日(月)

下 裏 祐 司

第 1 部 意識改革とは自己活性化である

～ 企業活性化はこの自己活性化で始まる（第 2 回）～

企業活性化はこの自己活性化で始まるの第 2 回目は、私の友人である「金家多美枝さん」の生き方を通して自己活性化とは何かを考えていきたいと思います。

～ 輝く緑の石に...金家多美枝さん～

私は、金家多美枝さんという重度身障者の方から磨くということを学びました。「磨く」とは「こすって、光らせたり、きれいにしたり、美しくしたりして、よくすること」とあります。どんな石でも、根気よく磨けば、輝くような石になります。又、「学校は学ぶ所だが、社会は自分を磨く所だ」ともいわれます。私たちの人生も、根気よく自分自身を磨くことで大きく変わってくるのではないのでしょうか。

この「磨く」ということを金家さんの次の詩で改めて知りました。



金家多美枝さんの絵画

石ころコロコロ

石ころ一つありました

巨きなお山になりたくて

石ころコロコロ転がって巨きなお山へ行きました

「君は山には成れないけれど ひよっとしたら

輝く緑の石に磨いたら 成れるかもなあ」と

気をとり直した石ころは 一生懸命磨きます

踏みつけられても 蹴られても 黙々と

いつか 気づかず知らぬ間に 緑の石になってゆく

石ころ コロコロ転がった

金家多美枝さんの詩

前頁の詩は、金家多美枝さんが出版された詩歌集「石ころコロコロ」の最初の詩です。

私は、この詩を読んで深く感動しました。重度身障者で自分では思うように体を動かすことができない多美枝さんが、一生懸命自分を磨こうとされている姿そのものであり、「やれば何でもできる」と信じて挑戦される姿に、感動するばかりでした。

金家多美枝さんとの最初の出会いは昭和六十二年に私が主催した高山市文化会館での中村久子女史遺品展でした。この時、多美枝さんの書道の師であり、人生の師であった滝原吉右衛門さんが多美枝さんの絵を持っておみえになり、「一緒に展

示していただけませんか」という依頼をされたのです。重度身障者の多美枝さんが描かれた絵に感動し、すぐに滝原さんとともに展示しました。

平成十六年十月十一日高山市文化会館において、金家多美枝コンサートが開催されました。多美枝さんが作詞した詩が作曲され、地元の合唱団の方々によって歌われ、又中村久子女史・杉原千畝さんを偲んで作られた短歌が地元の朗読会の方々によって朗読されました。

私が一番感動したのが、下半身に障害を持った小学生が相撲甚句を歌われたことと、失語症の会の方々によるハンドベルによる演奏でした。ここで歌われた詩をご紹介します。

ばあちゃんの手

一、
ばあちゃんの 手は ぶつくとと まあるい
それは 明治生まれの 女性の 手だ
田に働き 畑にも出 子守りしながら 小学校へ

二、
それもつかの間 十一で 貧苦の家を 救うため
製糸工場の 信州へ 野麦峠を 越えました
その頃のばあちゃんの手は どんなにか
ちいさく か弱で あったのか

三、
困難辛苦 血と汗と涙を ちいさな その手で
幾度 ぬぐってきたことか 苦しみ かなしみ
繰り返し 繰り返し ばあちゃんの手は
ふつくりまるく なってきた

四、
まあるい その手は 百円女工と ほめられた
きらきら輝く 勲章だ 幸福の歡喜に 満ちている
その喜びを 分けようと 花ぞつりや さるぼぼを
ばあちゃんは 一心に作ります ……

昭和六十三年六月二十六日、私が主催し、アポロ十七号キャプテン、ロナルド・エバンスさんを迎え、パーティを開催しました。そのパーティに多美枝さんもお招待し、多美枝さんからエバンスさんに「きらめく銀河のお客さま」という詩を英訳化し、贈呈されました。それは次の詩です。



左端エバンス氏

きらめく銀河のお客さま

一、透きとおった つめたい大気の中
星々が 一際輝いて観える
そんな 夜空のあなたから 星の お客さまが
きらめく銀河 はるばる渡って
地球観光に やってきた
お出迎えは 月のウサギさん
ながれ星バスの 乗り心地はどうでしたか

二、宇宙の旅が 何億年も続いて さぞ皆様
お疲れかと存じますが ご覧くださいませ
あれが 地球という惑星でございます
そこには 爽やかな空気 清らかな水 新鮮な緑があり
たくさんの 生き物が生存し
現在は 人間と呼ばれるものが 繁栄しております

三、しかし それも危いもんですよ
恐ろしくヤツカイな 原爆というしろものを
ワンサとこしらえて
スツタカ モンダカやらかして ほんとに
気が揉めて仕方ありませんよ ほんとに
人間ってのは 懲りない生物でありますから
それが 皆様の目に どう写りますか
わかりませんが じつくり 観ておいて下さいませ

金家多美枝さんの詩

私の父も四十二才で目が見えなくなり、四十五才という高齡で岐阜県立盲学校に入学・卒業し指圧師として、私たち三人の子どもを育ててくれました。目が見えない身障者としての父の姿を見ていましたが、障害を持って生きるということの苦しみを、健常者は決して理解することができません。しかし、このホームページを通して沢山の方々がその苦しみを少しでも分かち合えることができたらと願っております。

この出会いから今日までの長いお付き合いをしております。

金家多美枝さんからの投稿を掲載させていただきます。

きらめいて生きたい

金家多美枝

夜の帳のなか、幼少の私は漠然と「きらめいて生きたい」、と度々おもいながら眠りに就いておりました。何故だったのでしょうか。自分でも、理解しがたいわかい「こころ」の一面です。これは「夢」につながっていたのだろうか？ と最近になり振り返っています。

夢、あるいは希望。その萌芽と成長が、ひととの出会い・縁起(縁に因って起こる事)になって、私の「夢」たちをずいぶん実現可能にさせてくれました。幾つものつも...

ひとのこころは、みな「ダイヤモンド(金剛石)の原石」なのです。その原石を磨くことができるのは、研磨したダイヤモンド(実物も)だけです。はからずも三十代においての私はダイヤモンドの人というべき、四肢切断の「中村久子女史の生涯」を短歌に詠うことが胸きしむおもい、こころの鍛錬となりました。奇しくも若書きの一詩「石ころコロコロ」みたくて、苦笑しきりですが。

「夢は叶う(可能)ものである」。下裏さんが言われる「自己活性化」を、私流に云いほどけば夢=ダイヤモンド=こころ=人生を研ぎ澄ますこと。如いては「きらめいて生きる」に通じるのではないのでしょうか。

ひとは誰もが快活に生きていきたい...人生はシアター、ひとはエンターティナー、とおもっているのではないのでしょうか。障害の有無に関係なく(そうであるからこそ)、私もパソコンというステージ上で絵や詩、短歌、エッセイを演目に、きらめきを満喫したい。そう、今いる場所をたいせつに、輝いていこうと思います。



金家多美枝さんの絵画

「 星 誕 海 」



金家多美枝さん略歴

昭和36年1月8日	父一雄・母愛子の長女として8ヵ月の未熟児で生まれる。
昭和36年10月～ 昭和42年4月	脳性小児麻痺症状発症、通院加療開始。 県立下呂整肢学園に入園・小学校1年に入学。
昭和42年8月	園になじめず退園（就学免除）。
昭和44年7月	市あゆみ学園（母子通園センター）通園。
昭和46年4月6日	市立西小学校あゆみ分教室小5に編入。
昭和48年3月22日	市立西小学校卒業。
昭和48年4月7日	市立中山中学校あゆみ分教室へ入学。
昭和51年3月	市立中山中学校あゆみ分教室卒業。
昭和58年8月	家庭に於いて描画作詩活動...現在に至る。
昭和61年7月24日 ～25日	NHKギャラリーに於いて 「障害を乗り越えて描く金家多美枝 心の世界」展。
昭和62年5月	中村久子女史遺品展に際し、絵画・詩文を協賛出品。
昭和62年8月28日	詩集『石ころコロコロ』刊行。
昭和63年3月7日	昭和62年度岐阜県芸術文化奨励賞を受賞。
昭和63年6月26日	アポロ17号キャプテン＝ロナルド・E・エバンス氏に奇遇し、氏より国民栄誉賞標徹の自画像写真額を受く。

平成3年5月 平成3年10月4日	詩歌集『続・石ころコロコロ』刊行。 高山市文化会館小ホールに於いて 「金家多美枝の詩によるチャリティーコンサート」開催。
平成4年12月10日 平成7年5月1日	東海テレビひまわり賞受賞。 中村久子女史生誕百年、賛歌集『紗羅の花』刊行。
平成10年	「ふれあいアートステーション・岐阜」第1回大賞に『夢は大空へ』が選ばれる。
平成10年～	飛騨高山タウン情報誌「さるぼぼ倶楽部」に詩が連載される。
平成10年2月～ 7月	「杉原千畝」の生涯をワープロにて短歌に歌う。
平成13年	元旦よりパソコンを始める。
平成13年	「IT訪問指導」を受ける。
平成15年2月～	「さるぼぼ倶楽部」で隔月に短歌&詩を連載。 詩「さるぼぼ」CD化される。
平成15年4月～	岐阜新聞朝刊(こころ欄)にてエッセイ『生かされて』を連載中。
平成15年10月～	「さるぼぼ倶楽部」でエッセイ『多美枝の窓から オープン セサミ』を連載中。
平成16年10月11日	高山市文化会館で「金家多美枝の世界」開催(詩の朗読・合唱)。